

薄曇りのち晴れ

山岳絵画展を終えて

宮下啓三

二月末日からの一週間、東京日本橋の丸善画廊で「日本山岳会会員による山岳絵画展」が催された。予期以上に多くの会員諸兄弟から力作が寄せられ、これまた予期した以上に多くの鑑賞者を得た。出品者各位、会場に足をおこび下さった会員の方々、さらに直接間接におはげまし下さった会員の皆様に、私は実行委員会を代表して心からの感謝を言いたい。

今回の山岳絵画展は、まことに記念すべき展覧会であった。というのは、場所柄も一流で、歴史と格式を誇りとする丸善画廊としては、アマチュア画家たちに壁面を

提供する最初の展覧会となったからである。実行委員たちの不安もさることながら、丸善画廊側にしてみても、私たちの企画のために壁面を提供することは大きな冒険であった。

一方には不安、他方には冒険。つまり、画廊の側には、冒険を避けるための口実はいくらでもあったし、私たちの側には不安を理由に実行を思いとどまることがあっても不思議ではなかった。そもそも画廊の壁面を埋めるだけの作品が集まるのだろうか、それらの作品は多くの人々の鑑賞にたえるものだろうか。そのうえ、会場費用をまかなうに足るだけの売り上げ

がなくてはならない。不安の原因はいくつもあった。見ていただければそれで結構というだけの発表会ではすまされなかった。

幕をあけてみなければわからないという五里霧中の状態であった。薄曇りの空が、これから厚い雲におおわれるのか、それとも晴れわたるのか、判断しかねる状態なのであった。それでも丸善画廊は、日本山岳会に対する信頼感にもとづいて、画廊史に新しい項目を書き加える決意をした。その信頼が私たちをばげました。私たちは山岳絵画展の開催を正式に発表した。一方、日本山岳協会に属して専門画家として活躍しておられる会員に特に協力を求めて、地固めをおこなった。

案ずるより生むが易し、という古い格言の正しさを私たちはあらためて思い知らされた。三十八点前後をかかげるのが適当だという壁面に、五十一名の会員の作品が



昭和52年(1977年)

4月号(No. 382)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

薄曇りのち晴れ

—山岳絵画展を終えて—

(宮下啓三)……………(1)

山岳絵画展出品作品(I)……………(2)

『山日記』の日本三百名山(案)について

(皆川完一)……………(6)

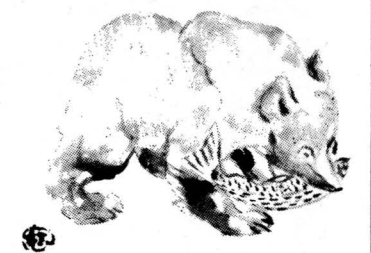
自然保護情報

これでいいのか? 矛盾した自然保護行政(田村聡明)……………(9)

「この一本展」から……………(10)

会員動向、ルーム日誌など……………(11)

カット/松本慎太郎・谷アユ子



並ぶこととなった。実行委員会で予備審査をおこなって水準に達しない作品の展示をひかえることを考えていたのだが、寄せられた作品はいずれも個性味あふれた力作であり労作であったから、取捨選択の必要はなかった。作品の点数と質の問題はなくなった。不安の霧は晴れた。

展覧会場の様子については、数多くの来会者の目で御覧いただいた通りである。東京の中心部のビルの谷間ですがすがしい山岳絵画を鑑賞するために画廊に足をここんだ人々の数は、画廊の担当者が驚嘆の声を発したほど多かった。日本山岳会会員の数を差し引いてみても、なおかつ平常をはるかに上回る動員数であったという。そして会場で日本山岳会への入会を

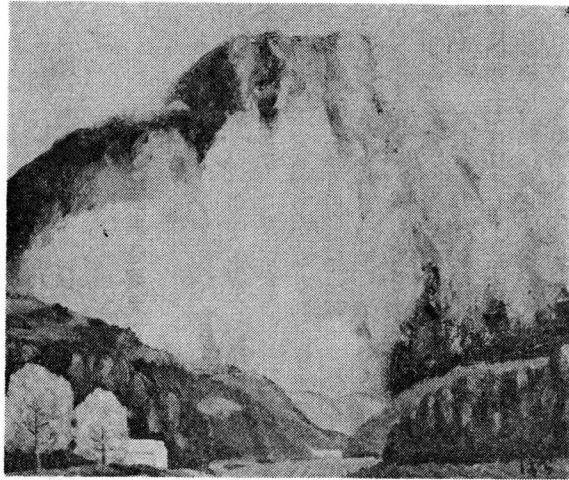
申し出る人さえいた。さいわい、会場費用をまかなって余りあるほどの売り上げも確保された。多くの方々が成功を祝して下さった。私たちとしても卒直にこの成功をよろこびたいと思う。その成功は実行委員会の功績ではない。出品者、鑑賞者、楽屋裏で作品の搬送など厄介な仕事をこころよくひきうけてくれた図書委員会の有志たち、直接会場へ足をはこべない遠方でありながらはげましの言葉を寄せられた地方在住の会員たち、すべての人々の精神的あるいは物理的な助力のたまものであった。丸善画廊の担当者たち、そして作品の額装と運搬に誠意あふれる協力を申し出られた画材店「画翠」にも、篤く御礼申し上げたい気持ちでいっぱいである。その方々の氏名をあげたいが、一々あげるとしたならばこの会報の二頁分も三頁分も埋めてしまうほどの長いリストになるであろう。それほど多くの会員たちと会員外の人々の理解と協力があつた。日本山岳会のクラブ組織としての魅力と特性が発揮されたことの良い証明である。

会期中にすでに次の開催をすすめる声があがった。いろいろ反省し検討するべきことが残さ

山をきれいに川は持ち帰る

絵画展出品作

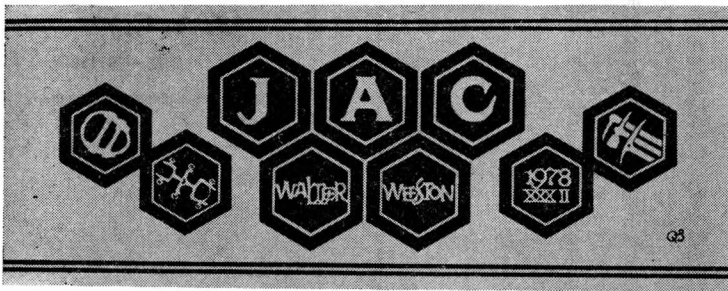
東京丸善画廊でおこなわれた日本山岳会会員による山岳絵画展は、別項宮下啓三氏の報告のとおり、予想をうわまわる盛況でした。会場にお越しになれなかった方々のために、今月と来月の2回にわたって出品作品をご紹介します。



▲「武甲山」神原忠夫

れているので何よりもまず御批判をおおぎたく思っている。その上で次期開催の可能性と運営方法についての検討を開始したいと考えている。

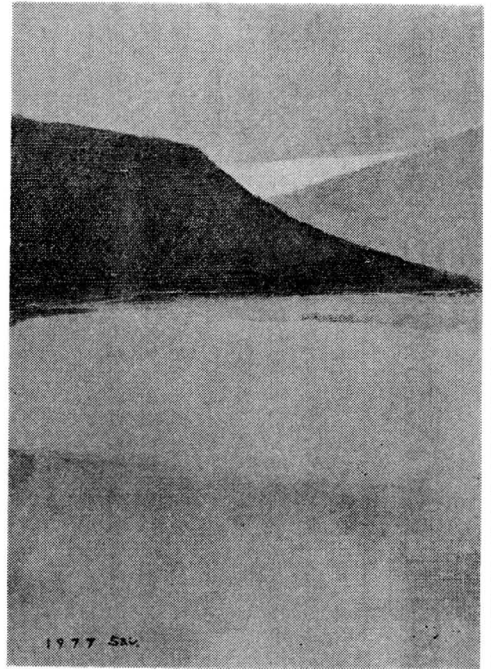
(山岳絵画展実行委員会を代表して記す。なお当委員会は私以外に下記五名によって構成されていた。近藤信行、清野恒、山崎安治、山里寿男、山本良三。委員のいずれかに御高評御批判御提言をお聞かせいただければ幸甚である。)



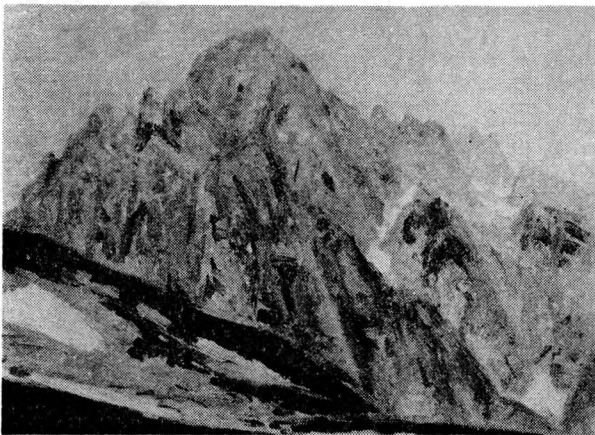
◀「ウェストン祭記念手拭の原図」
佐藤久一朗



▲「山」串田孫一

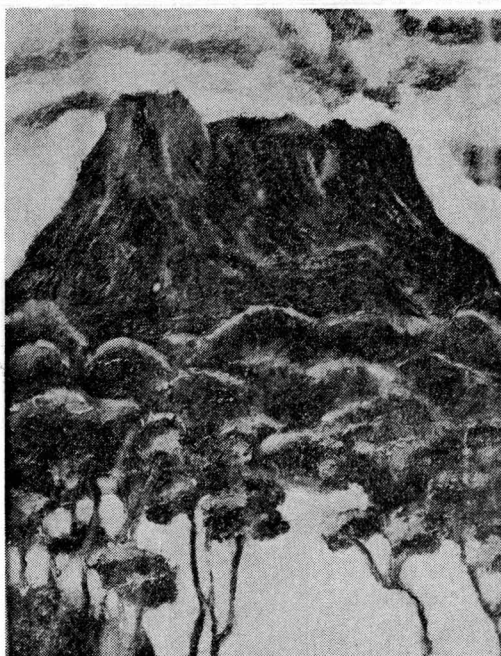


▲「アンデス早春」三枝礼子



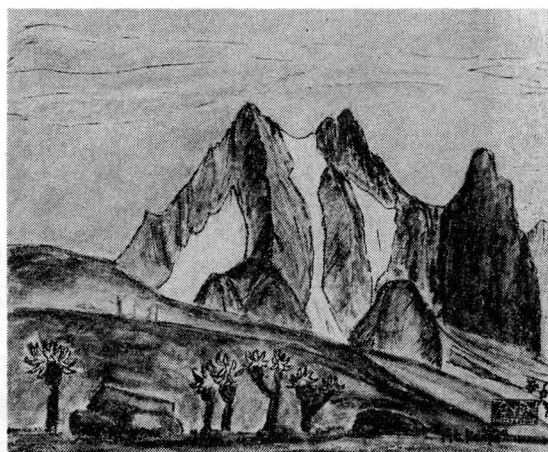
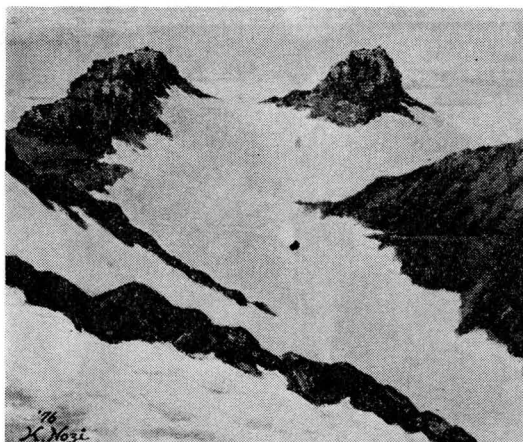
◀「剣岳」藤江幾太郎

▼「日高の山」坂本直行



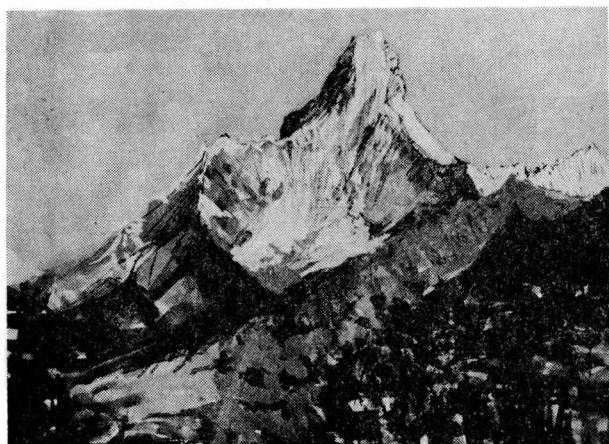
▲「桜島」玉井裕夫

▶「安達太郎の春」野地克也



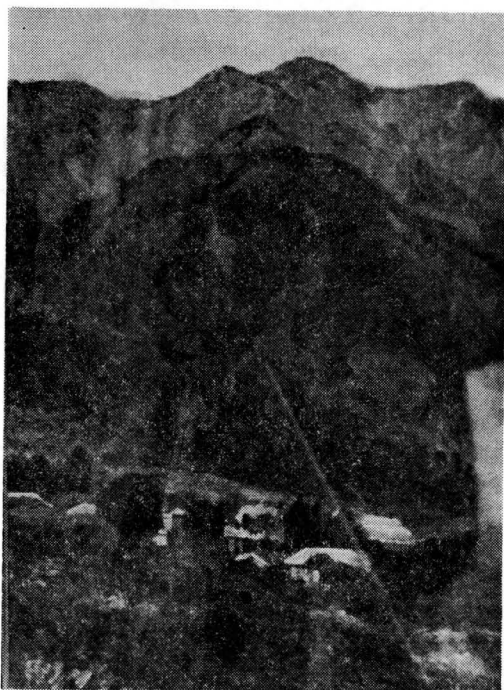
▲「Mt. Kenya」芳野満彦

▼「アマダブラム」清野 恒

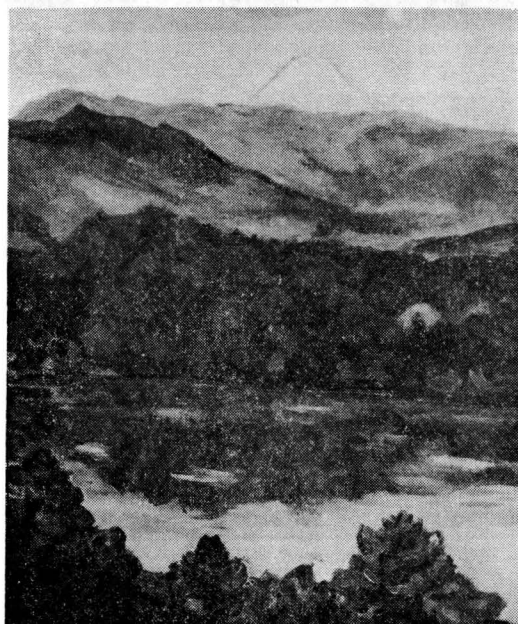


▲「上高地早春」安藤忠夫

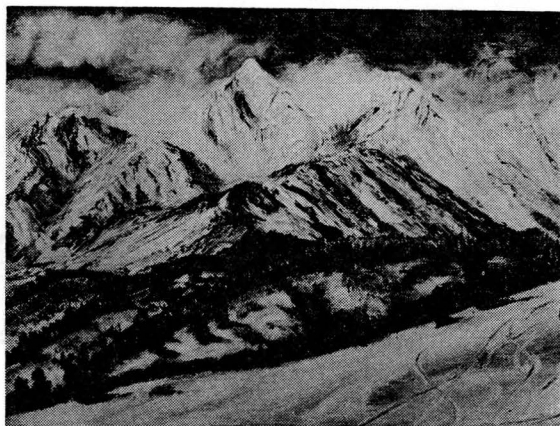
▼「ナムチェへの道」岸 栄



▲「秋の塔ヶ岳」上杉吉昭



▲「一碧湖の富士」小原勝郎



◀「雪嶺」山口一孝



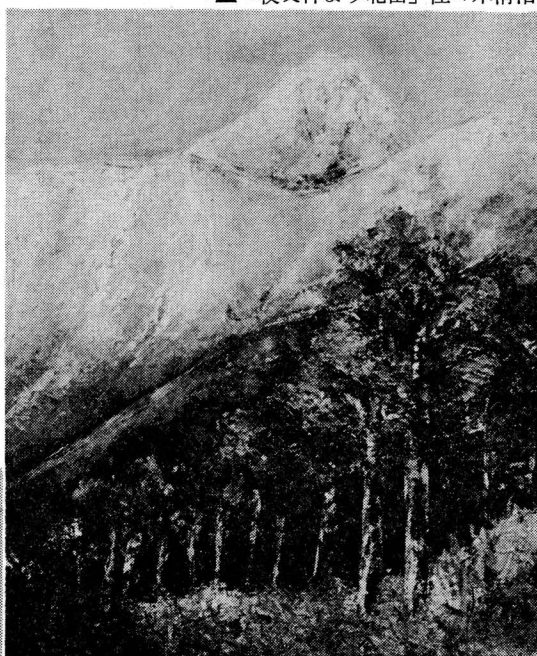
▲「北ア・越中沢岳」松本慎太郎

◀「下栗より聖岳遠望」山口 亮



▲「前穂高展望」石原寛治

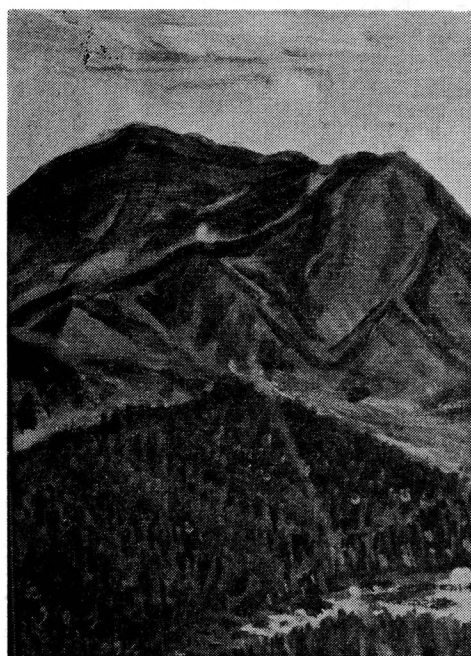
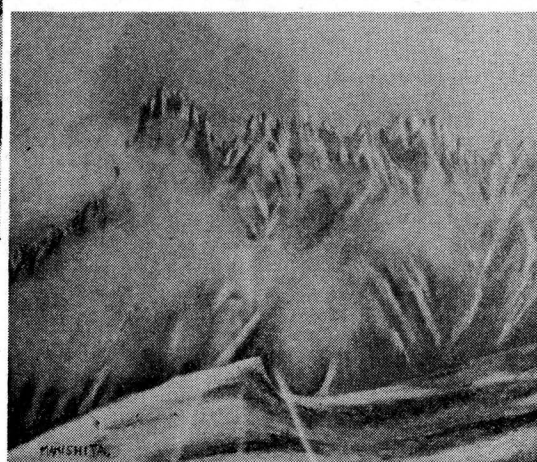
▲「夜叉神より北岳」佐々木清治



▶「越前野向・兜山」中村義



▶「北鎌尾根独標」
牧下一己



▲「懐しや金峯・瑞牆・塩見岳」河野幾雄



◀「知床の山」大塚武

『山日記』の日本三百名山(案)について

皆川 完 一

名山の規準

日本の山の中から三百の名山を選ぶとしたら、どんなことになるか。そういう興味にとりつかれて山日記編集委員会はその選定を行なってみた。結果は「日本三百名山(案)」として、『山日記』の今年版に掲載し、ごらんいただいているとおりである。しかし、選定の意図、規準、また選定の経緯などについては、『山日記』に何も書いておかなかった。いまおくればせながら、会報の紙上を借りてそのことを報告し、なお一層の御検討をお願いしたいと思う。

まず、名山を選ぶ規準は何であらうか。これは名山の定義にもかかわることだから、最初に明らかにしておく必要がある。

名山とは「名高い山、りっぱな山」のことである(『広辞苑』)という解釈は、おそらく一般に承認されていることであろう。しかしこの「りっぱな」ということには、主観的な価値判断が多分に含まれるし、「名高い」ということはどの程度のことか、判断のむずかしいところである。

だが、『広辞苑』が「名高い」

ということをも名山の第一義としたように、名山は多くの人々に知られていることが、第一条件であろう。そしてこの名高いということには、現在においてだけでなく、昔から広く知られていたということも含まれるはずである。とすれば、名山として選ばれるためには、時間的にも空間的にも、広くりっぱな山として知られていることが、必要条件となろう。

りっぱな山という価値判断は、主観的なものであるばかりでなく、歴史的なものである。山に対する人間の態度、嗜好には、時代により変遷がある。かつては、りっぱな山はすべて信仰の対象であった。名高い山というのは、みな信仰登山の山として知られていたものであった。しかし、近代登山の対象として山を考えた場合は、またおのずから違ったものになるであろう。

だから、名高いということが、時間的・空間的な意味においてであるといっても、この二つの条件を平等に満足させることは、実際問題としてなかなか困難である。しかし、「名山」という字義から考えるならば、歴史的な配慮も必要

であって、近代登山の上から、今目的な意味において名高いというのみでは、名山といえないであろう。そのような山は、言葉のニュアンスからいえば、「名峰」とよぶのがふさわしく、「名山」と区別した概念とするのが、この際便利である。

名山については、古く橋南谿に「名山論」という文章があり、谷文晁の「日本名山図会」、志賀重昂の「日本風景論」などの著述がある。これらは、彼らが何を名山と考えたかを知る上で、大変参考になるが、いまここでは、最近のものとして、深田久弥の「日本百名山」選定の規準を読み返してみることしよう。

深田久弥は、第一に、山の品格を重んじた。誰が見てもりっぱな山と感歎するものがなければならぬのである。

第二に、山の歴史を尊重した。昔から人間と深いかわりを持つ山を除外するわけにはいかないものである。

第三に、個性のある山を採った。他の山にみられない、その山だけがそなえている独自のもの、それを尊重した。

第一と第三の規準は、りっぱな山とは何かということと、深く関係することである。深田久弥はここで、きびしさ、強さ、美しさなど、何か人の心を打つものが必要であるとし、形体であれ、現象であれ、強烈な山の個性がなければならぬとした。

第二の規準は、古くからりっぱな山として尊敬されて来た伝統を尊重したものである。しかし、過去の名山、必ずしも現在の名山ではなくなりつつある。この辺が今日の問題として問われているところであろう。りっぱな山であるが故に過去において名山とされ、名山なるが故に開発の魔手がのびて俗化し、現在では名山とされないという例が多いのではあるまいか。これでは人権ならぬ山権を蹂躪した人間の身勝手というべきであろう。

ただ深田久弥は、付加条件として、大よそ千五百メートル以上という線を引いた。山高きをもって尊しとせずだが、われわれが考える山のりっぱさの中には、無意識のうちに高さがその要素となっているから、百名山ということになれば、これはしかたがない。しかし三百名山では、その線を九百メートルぐらいまで下げることができであろう。もちろん、例外はみとめなければならぬが。

三百名山の原案

以上の考えに立って、三百名山の原案は作られた。だから、この三百名山は深田百名山の延長線上にあると考えていただいてもさしつかえない。

原案は、上述の「日本名山図会」「日本風景論」「日本百名山」のほか、『日本山嶽志』『歴史の山一〇〇選』、高校用の日本地図等を参照し、また『信州百名山』『越中の百名山』『ぎふ百名山』『近畿百名山』『九州の山と高原』など、地方で名山として選ばれているものも参考にした。そして深田百名山中の山に●印をつけ、さらにそれにつぐ五十座の山に○印を加えて「百五十名山」の試案を示した。これは問題点をなるべくしぼろうとしたためである。

この三百座の原案を、百名の方におみせして、御検討をお願いした。その調査方法としては、この原案に加えるべき山があったら、なるべく同数の山をへらしてほしいと依頼する形をとった。もちろん、考え方としてはこの逆でもよいわけで、捨てるべき山があったら、それと同数の山を加えておいていただいてもかまわないのである。お忙しいところ、短い期間を限ってのお願いで、まことに御迷惑なことと恐縮しているが、お願いした半数の五十名の方から回答がよせられた。

調査にあたっては、選定の規準を示さなかった。これは自由な立

場でお考えいただき、また規準について特に御意見がある場合は、それを伺い、こちらの規準も再検討しなければならぬと考えたためである。しかし、大体上記の選定規準は暗黙のうちに承認されたよう

で、大した問題は起きなかった。だが規準を示さなければ回答できないという、至極ごもっともなきびしいお叱りを、少数の方からいただいた。また、この仕事は、あまり知られていない山や、静かな山など、めいめいの好きな山を選ぶのだと感ちがいされた方も、一部にはあったようだ。

われわれにとつて、少し不満であったことは、各地域に分けた名山の配分は、はじめから決っているわけでもないのに、各地域の中で山を入れ替えられた方が多かったことである。もっと日本の山全体をみわたした上で、お考えいただきたいかったのであるが、この点は各地で我田引水にならなければと恐れていたことが、全く逆の結果になった。これは回答者諸氏の謙虚なお気持のあらわれであろう。

またこの種の調査方法の欠点として、原案について賛否を問うだけで、新しい提案については、他の意見を聞くことができないということがある。しかし何となく、今回の調査で最も大きな欠陥となったことは、ぜひ御意見を承りたいと思っていた何人か

の方々から、御返事がいただけなかったことである。そしてアンケートの人選についても、多くの人の御意見を聞くべきであったのであろう。

このようにして、よせられた回答をもとに、原案のうち四十五座の山の入替を行ない、この日本三百名山(案)はでき上ったのである。やってみると、一回の調査で決定版が作られると思ったのは、当方のあさはかであったことがよくわかった。以上の反省点を残している以上、この作業はこの案を土台として、なお検討をつづければならぬであろう。「案」とした理由はそこにある。

次頁に日本三百名山(案)を掲げて、御協力いただいた方々に対する報告に代え、さらに大方の御検討をいただく素材とした。『山日記』には、山名のほかに標高・五万図幅名・行政区画が記されているが、ここでは紙幅の都合上省略した。表の中の*印のある山は、削除せよという意見のあったもの。また付表は、加えよという意見のあった山。ともに少数意見であるため、今回は採用を保留した分である。このあたりが、今後の問題となりうるであろう。

企画の意図

なお、回答をよんでいるうちに気づいたことだが、このような選定を行なう意図は何かということ

も、ここに書いておくべきであろう。わかりきったことだと思ふのは、一人合点にすぎないから、次にそのことを記して、御諒承を得ておきたい。

いってみれば、こうした試みは机の上のあそびであって、知的遊戯以外の何ものでもない。したがって観光地の営利政策的な人気投票とも、全く無縁である。山登りのたのしみの何分の一かは、山の書物をよんで、山のことを考えることにあると思うが、日本の名山を選んでみることも、それにとらずにのしいことにはちがいない。

事実、そのとおりであったし、いまさらのように日本によい山が多いのに驚かされた。山が多いのに驚かされた。もう一つ。登山者には人おのに名山があるはずなのに、日本山岳会あたりがその選定を行なうのは、個人の自由な思考をさまたげる、という考えもあるようだ。人がめいめい心中に名山を持つということは、たしかに他からさまたげられたくないのしみにちがいない。しかし、名山は個人の好きな山という意味ではあるまい。歴史的・社会的にも承認された通念と考えるべきものであ



アユノ谷/カット

う。それならば、客観的な意味における名山とは何か、ということを考えておくことも必要になる。もちろん、厳密な意味において、名山の選定に客観性などありはしない。それでも多くの主観を累積すれば、かなり客観性の高い選定も不可能ではあるまい。少なくとも、一般に何が名山とされているかということを知る、一つのめやすにはなるであろう。

だから、この選定が没個性的になるのはやむをえない。恐らく今回の調査に協力された方々も、この案をごらんになって、多くの不満をおもちであろう。少数意見はこの表にはあらわれないから、どなたにも満足のいかない結果になっているかも知れない。

深田久弥が「私の主観で選択した」と断言したような、個性の強い三百名山ができるとしたら、それはそれで価値あるものにちがいない。しかし、三百座となると、それを自信をもって選ぶ人が何人おられるであろうか。失礼ながらきわめて少ない数であろう。しかも悪いことに、そういう方々は、なかなかこのようなことをな

さらぬのである。とすれば、いまのところ、衆知をあつめてみることもやむを得ぬところであろう。いや、かえってその方が、一般に共通した考えをさぐることになって、有意義な試みになるのではあるまいか。われわれはそう考えているのである。最後に、今回の調査に御協力下さった方々の芳名を記し、感謝の意を表する。

一原有徳、伊藤弥十郎、今井雄二、今西錦司、今西寿雄、太田敬、奥原教永、小倉厚、織田収、小原勝郎、折井健一、加藤勝義、金坂一郎、川崎精雄、黒石恒、酒井昭市、坂倉登喜子、佐藤一栄、佐藤敏彦、柴田均二、島田巽、鈴木実、高木泰夫、高遠宏、武田満子、中田清兵衛、仲西政一郎、成瀬岩雄、西諒、沼倉寛二郎、野上成男、野口秋人、橋本誠二、福田宏年、藤井運平、藤島玄、堀田弥一、牧野衛、松長晴利、三谷孝一、宮下啓三、宮下秀樹、室賀輝男、望月達夫、山口節子、山崎安治、山本朋三郎、横山厚夫、若林啓之助、渡辺公平(五十音順・敬称略)

* * *

「日本三百名山(案)」について、御意見をうけたまわりたいと思います。この案の検討に御協力いただける方は、日本山岳会まで御連絡下さい。調査用紙をお送りします。

日本三百名山(案)

北海道 利尻山 岳 羅臼山 岳 斜阿寒山 岳 天塩山 岳 ニセウシカ 武利山 岳 大雪山 岳 狩岳 トムラウシ山 オプタテシケ山 十勝山 岳 ニベツツ山 茅室山 岳 幌尻山 岳 東北 八甲田山 岳 岩木山 岳 白神山 岳 七時雨山 岳 姫神山 岳 早池峰山 岳 五葉山 岳 八幡平山 岳 八岩山 岳 鳥帽子山 岳 駒賀山 岳 和石山 岳 焼栗山 岳 越後 机北山 岳 差股山 岳 飯豊山 岳 大日山 岳	浅草山 岳 未文山 岳 荒沢山 岳 平ヶ岳 中ノ岳 南会津・那須・日光・尾瀬 八溝山 岳 筑波山 岳 二岐山 岳 那須山 岳 七鹿山 岳 荒海山 岳 田代山 岳 帝釈山 岳 朝日山 岳 上越 巻機山 岳 朝日山 岳 茂倉山 岳 谷川山 岳 万太郎山 岳 上信 高社山 岳 笠岩山 岳 菅根山 岳 白阿山 岳 湯ノ丸山 岳 籠ノ登山 秩父・奥多摩・奥武蔵 両神山 岳 武甲山 岳	八海山 岳 苗場山 岳 佐武山 岳 鳥甲山 岳 金北山 岳 米山 岳 丹沢・富士山付近 大黒山 岳 丹沢山 岳 箱根山 岳 天城山 岳 三ツ峠山 岳 ハケ岳・霧ヶ峰付近 八ヶ岳山 岳 蓼科山 岳 霧ヶ峰山 岳 南アルプス 入笠山 岳 鳳凰山 岳 駒ヶ岳山 岳 仙丈山 岳 白根山 岳 間ノ岳山 岳 農鳥山 岳 塩見山 岳 荒川山 岳 赤石山 岳 奥茶臼山 岳 聖岳 妙高・戸隠 妙高山 岳 火打山 岳 焼山 岳 雨飾山 岳 (青海)黒姫山	北アルプス 朝日山 岳 雪倉山 岳 白馬山 岳 唐松山 岳 五龍山 岳 鹿島槍ヶ岳 爺ヶ岳 針ノ木山 岳 鳥帽子山 岳 赤牛山 岳 水晶山 岳 鷲羽山 岳 三俣蓮華山 岳 双六山 岳 僧ヶ岳山 岳 毛勝山 岳 剣立山 岳 奥大日山 岳 嶽山 岳 御岳・中央アルプス 御岳山 岳 御前山 岳 小秀山 岳 奥三山 岳 界岳山 岳 駒ヶ岳山 岳 加越濃飛 白木峰山 岳 金剛堂山 岳 人形山 岳 医王山 岳 大門山 岳 大笠山 岳 大笹山 岳	鷲ヶ岳山 岳 位川上山 岳 近畿 伊吹山 岳 御在所山 岳 俱留尊山 岳 高見山 岳 大台ヶ原山 岳 竜門山 岳 山上ヶ岳山 岳 稲村ヶ岳山 岳 中国 扇ヶ山 岳 水ノ山 岳 大山 岳 四国 剣三山 岳 東赤石山 岳 伊予富士山 岳 九州 英彦山 岳 背振山 岳 経雲山 岳 由布山 岳 久住山 岳 阿蘇山 岳 祖母山 岳 荒島白山 岳 能郷冠山 岳 大峰山 岳 伯母子山 岳 護摩壇山 岳 葛城山 岳 金剛山 岳 武奈ヶ岳山 岳 愛宕山 岳 長老ヶ岳山 岳 上蒜山 岳 三瓶山 岳 瓶ヶ山 岳 石三本山 岳 森本山 岳 崩山 岳 大見山 岳 国市山 岳 尾鈴山 岳 霧島山 岳 高千穂山 岳 桜島山 岳 開聞山 岳 宮之浦山 岳
--	---	--	---	--

*印は、三百名山から
削除せよという意見の
あった山。

付表 三百名山に加えよという意見のあった山

北海道 礼文山 岳 知床山 岳 硫黄山 岳 東北 安摩山 岳 家山 岳 耶山 岳 祝瓶山 岳 越後 新保山 岳 鷲ヶ山 岳	日本平山 岳 五剣谷山 岳 剣ヶ倉山 岳 下津川山 岳 南会津・那須・日光・尾瀬 丸山山 岳 梵天ヶ岳山 岳 台倉高山 岳 黒岩山 岳 上越 柄沢山 岳	上信 浅間山 岳 経塚山 岳 (刈羽)黒姫山 岳 菱ヶ岳山 岳 秩父・奥多摩・奥武蔵 白石山 岳 唐松山 岳 ハケ岳・霧ヶ峰付近 飯盛山 岳 南アルプス 鋸山 岳 朝日山 岳	北アルプス 十石山 岳 御岳・中央アルプス 摺古木山 岳 南木曾山 岳 加越濃飛 屏風山 岳 近畿 棧敷ヶ岳山 岳 地蔵山 岳	中国 吾妻山 岳 四国 飯野山 岳 九州 高隈山 岳
--	---	---	---	---

—奈良県大台ヶ原の場合—

田 村 聡 明

額国費買上げが決定した。

国立公園行政のネックといわれてきた私権の問題を解決する方法として期待される民有地買上げ制度は、この大台ヶ原がきつかけになって生れ、今までのところ十分の十の全額国費で買上げになったのは大台ヶ原だけである。

今後十年間は県有地であるが、その後は国が自ら土地を保有する自然公園地域が生れることになり、公園行政のモデルケースになることであろう。

その大台ヶ原で、奈良県は五十年前から半額国費補助を得て、山上の歩道のコンクリート舗装を始めた。駐車場を中心として放射状に、尾鷲辻、日出ヶ岳、シオカラ谷に至る、観光客が最も多く利用する道を、コケを削り木の根を伐り、岩を砕いて道幅を拡張、切り、石を積んで階段を作り、路肩の土が見えないまでにセメントで塗り固め、周囲の自然景観に全くそぐわない歩道が出現した。

自然石を並べただけの道であれば、隙間に草が生えトカゲが隠れることもでき、野面積みの石垣にはシジュウガラやオオルリが巣をかけることも出来るが、目地をセメントで塗り固めたのでは道は死んでしまう。雨が降れば排水路になって、大量の雨水を受ける場所に新しい破壊を生むことである。大台教会（山小屋）に泊る登山者の九割が反対し、県の監視員

ですら功罪相半ばすると語った。尾瀬では軽量コンクリート板、アルミ板など研究した結果、やはり木道が一番良いということ、年間四千万円をかけて木道が維持されているときく。大台ヶ原において、このような研究がなされたのであろうか。全額国費で買上げてまで保全しようとしている民族的遺産である自然の中で、何故このような荒っぽい工事が行われたのか理解に苦しむ。

軽装に街靴のまま、車で簡単に山上にやって来る観光客が歩きやすいように、歩道の拡幅と舗装が行われる一方で、大蛇崱の岩頭は太い鉄柱と鎖で囲われ、その手前には、ここから先は装備不十分な人には行くな、と制札が立ち、どこにもある普通の山道にすぎない滝見尾根の登山道が「危険立入禁止」になっている。

また、奈良県は山上二帯でのキャンプを全面的に禁止しているが、その禁止措置は一切公示、広報されていない。そのため、入山者は何も知らずにテントや食料を持ってやって来るが、監視所でキャンプ地を尋ねた者は禁止を言い渡され、一方、勝手にキャンプした者は黙認されて、ひどい時は三十張り近いテントが監視所の目と鼻のところに張られている。このような曖昧な態度の県は、五十年の三重国体の際、苔深いナゴヤ谷でのキャンプを許可して、その矛

盾した行政の姿勢を地元紙に指摘された。

学者、研究者を中心とした地元
の自然保護運動に登山者の立場か
らかわってきたが、行政や学者
は登山者を自然破壊者視する傾向
が強く、一方登山者側の活動は全
く低調である。登山者にそのよう
な行為があるのは事実であり、そ
な行われれば自身の反省と努力に
よって正されなければならないの
は勿論であるが、有料道路が出来
て以来のすさまじい破壊と比較し
た場合、それは実にささやかなも
のである。整備という名で行われ
る破壊や、大きな破壊には目をつ
ぶって小さな保護のモラルが説か

れる実態を目にするにつれ、無償の行為として本音で自然に接している登山者がぼつぼつ発言しなれば大台ヶ原の利用と管理の方向が変な方に行ってしまうのではないかと考える。

しかし、だからといって、登山者にとっての自然保全の論理が明確につかめているわけではない。ただ最近痛感するのは、自然を人間があまり勝手にいらわずに、不便なままそっとしておけばそれだけで良いのではないかということである。荷を肩に額に汗して登り、焚火で飯をたき、テントに眠り、自然を肌で感じ自然への愛と畏れを知るものが自然保全の原点である。

最新入荷の本

- 中森**と**湖**と**火**の**山**（西尾寿一）1,400円
中カシミール・ヒマラヤー・ハラムク登山報告書・2週間**の旅**・1976年（六峰山岳会）800円
中岩燕Ⅵ（麻布学園山岳部）3,600円**中雲海**
 （法大体育会ワンダーフォーゲル部）3,000円
中資料目録=**インド亜大陸**（向後元彦・石井一郎編）400円**中セイロン島の密林遺跡**（法政大学セイロン島密林仏跡探査隊）1,000円 **中イスラム世界のふたつの割れ**（法大探検部・早大探検部）500円 **中ウンダンウンダン・ボルネオモモゴン族の祭り**と**儀式**（東京農業大学農友会探検部）500円
中詩集・山の風物誌（伊藤秀五郎）1,400円
中マナスル1974-日本女性マナスル登山隊報告書（同人ユングフラウ）3,400円

茗溪堂 ＜山の本の売場＞ お茶の水店三階
営業時間 平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

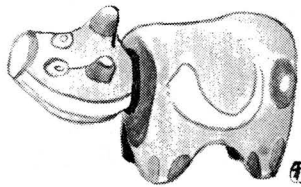
「この一本展」から

Himalaia
Cashmiriano

この本はイタリア隊（ピアチエンツァ）による一九一三年のクン初登頂正式報告書である。クンといえば、七〇七七メートルの山であるが、ヒマラヤで七〇〇〇メートル以上の高峰で登頂された順に言えば、トリスル（一九〇七年）、パウフリ（一九一一年）に次いで第三番目に登頂された山である。深田久弥氏が「ヒマラヤの高峰」を書かれた時、孫引きをしないのが原則であったが、クンに関する限り例外であった。深田氏はこの本に拠ることをしなかった。というよりこの部厚い正式報告の存在を知らなかったようである。白水社版「ヒマラヤの高峰」の「クン」の項の参考文献にも、この本は載っていない。葉師義美氏の「ヒマラヤ関係図書目録」には、さすがに載っているが、日本ではこの本に言及された文章がないと思う。メイスンでさえ見ていないようである

し、クルツでさえ、この本を手にしたのは戦後であった。

この本がヒマラヤ文庫の中で不遇な目にあっているのは、イタリア語で書かれていることと、出版が登頂後十七年もたった一九三〇年ということによるのであろう。しかし、不遇に終るには、りっぱな本で、大きさは26×21センチ、厚さは五・二センチ、ページ数六一五ページ、図版八九、写真三八〇で、



スル地方の十万分の一地図が付けられている。内容もクン登頂ばかりでなく、付近の山地の踏査結果が掲載され、学術報告も含まれている。というより、巻の半ばは学術報告である。ヒマラヤ登山に関する限り、基本的な文献であり、古典でありながら、また、重量三・五キロという大部な本が忘却されているのが残念で「この一本」とした。

(水野 勉)

DEL
ALPINISMUS
IN
BILDERN

この本は二十五年程前神田の村松書店でさがしたものと記憶しているが、京都の一信堂のラベルがはってあった。（今でもそのまま）

私は独逸語は駄目なので、この本にふんだんに入っている山と登山の絵を見て楽しんでいく。

この本については、今は亡き山岳書誌家として著名だった高橋文太郎氏の『山の人達』（昭和十五年、竜星閣版）の二二頁以下に三十頁に亘り「山岳画家コンプトン其他」という標題のもとに詳細にわたって紹介してあるからここには内容の説明はしない。（尤もしろといわれてもくわしくはわからないのがほとんどだが）

ただ特記してよいことは、高橋氏も書いておられる通り、日本の山の古来からの絵もたくさん掲げられ（北斎を初めとして南画家も含め）、特に「山岳」

六年一号所載の故中村清太郎氏の「スバリ岳より越中アルプスを望む」のスケッチが収められていることだ。中村画伯のご生前、筆者もこの本についてお話し上げたが、載っておくことはご存じなかった。

なお、この本には登山、スキー関係のポスター、山岳会関係機関誌の表紙、蔵書票迄集めてあり、特に、アルパイン・クラブの年次大会（一九一〇年）晩餐会のメニュー標と思われる、コンプトン画伯の、日本の



富士山をあしらった風景画も載っておくことは面白い。

非常な力作であることがうかがえる。（著者のスタイニッツェルと言う人のことは小生には不勉強でわからない）

この本以後、アルピニズムと絵画等について、このような熱意のこもった著書のあることを聞かない。

Alfred Steinitzer 著
R. Piper & Co. Verlag München 1924（四八八ページ、アート紙）（石川治郎）

1977 ALASKA, CANADA, U.S.A.

ヨセミテ・バックパッキングとMade in U.S.A.

8月7日(日)～8月15日(月) 9日間¥320,000(全食付)

カナディアン・ロッキーズ氷河の峰登頂

8月5日(金)～8月13日(土) 9日間¥370,000(全食付)

他にアラスカ氷河の峰、マウント・レニア登頂、冒険旅行など

企画	編 ロッキーズアーズ 〒112 東京都文京区後楽1-1-17 担当/黒川 恵(日本山岳会、カナダ山岳会会員)	主 催	機 トラベル 日本 一般登録7号
----	---	-----	------------------

り、そのための指導啓蒙の場所として、国立自然公園はその存在意義があるのではないだろうか。自然公園は、都市生活のうさの捨て場ではなく、本物の自然の静寂の中で、自然回帰への想いを確かめる聖なる場であるべきであろう。今西錦司会長から、そんな山は観光客にくれてやって、もっとありがたい山を探したまえ、とお叱りを受けそうであるが、深い渓谷と原生的自然を残すこの大きな山を、聖なる山として保全したい気持ちをまだ捨てかねて迷っている。渡辺委員長が、会報三六一号に書かれたように、「山男のエゴなどといわれても、もう気になどしてはいられない」と思う。

ルーム日誌

(52年1月)

- 2日(水)雪崩研究会
- 3日(木)山岳編集委員会
- 4日(金)理事会
- 7日(月)集会委員会
- 9日(水)集会委員会
- 14日(月)集会委員会
- 15日(火)図書委員会、財務委員会
- 16日(水)三水会
- 17日(木)自然保護委員会
- 18日(金)図書委員会有志懇談会
- 21日(月)集会委員会
- 22日(火)青年懇談会、図書委員会
(絵画展)
- 23日(水)書評委員会
- 25日(金)常任評議委員会
- 28日(月)ルーム委員会、集会委員

会
今月の来室者三七六名

会員異動(52年2月)

名義変更

- 五三〇一 杉山 叡(正洋)
- 七六九七 荒木幸子(中)

物故者

- 二二〇六 可知 邦成(52・2・17)

除籍取消

- 六一七三 芳野 満彦
- 四三七一 熊谷とも子
- 四五三五 福原 健司
- 六八八一 広田 靖典
- 一四九七 藤村 泰三
- 五九六〇 久保 治紀
- 五十二年除籍者
- 二五一四 菊地 徹(海外)

△山菜勉強会△

片岡博氏(『山菜記』著者)を講師に、山菜の種類、料理法などを学びたいと思います。

日時 6月1日(水) 18時30分
場所 日本山岳会ルーム

△山菜山行▽

日時 6月11日～12日

場所 越後浅草岳

参加費 六〇〇円(宿泊代、山

菜料理、飲み物、マイク robes 代)

集合 6月11日午前10時上野駅

宿泊 新潟県入広瀬松屋

申込み 電話またはハガキで山岳

会事務局まで。詳細は参加者に通

知。

以上・日本山岳会集会委員会

*前号記載の「スイス・アルプス名画展」は、原稿締切後、日本山岳会後援が決まりました。後日の記録のため、注記いたします。

*「山」に原稿をお待ちしています。新鮮な文章をお寄せください。

(会報担当・大森)

昭和五十二年四月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六〇一

利根川商事株式会社ビル

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 錦 司

編集代表 大 森 久 雄

(813)二八六(代表)

振替口座東京三二四二九番

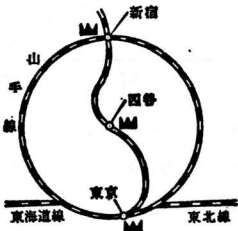
東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6566
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべし なんだも
持たない方がいい
けれども、どうして
要するものがある。
なしろ人間でずから
そして登山ですから

どうしても必要なもの
をこしらえてみる
責任はもてます

かたるギンテイ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)9066 スキー店
大阪店・北区岩田町上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



山の新聞

詩集 山の風物誌

伊藤秀五郎

A五判一四八頁上製箱入
定価一四〇〇円

伊藤さんは自然科学者でありながら豊かな詩心を抱いておられた。序詩として巻頭に置いた「草原の生きものたち」は病床で最後に書かれたものであるが、こうした寂しさと明るさの融け合った風景を今も静かに眺めておられるように思える。

内容……後記、装釘・串田孫一
／草木叙情／草木余情／山の風物詩

マナスル1974

日本女性マナスル登山隊報告書



同人ユングフラウ
B五判 カラー白黒写真真四〇頁
本文二六〇頁 定価三四〇〇円
女性の可能性を追求した山好きのグループが互に力を合わせてその背後にある諸問題と対処しながら、紆余曲折の末実現させた日本女性マナスル登山隊の軌跡と、これに関係した研究、調査を併せて集録した。

山日記 日本山岳会編 A六ポケット
一九七七年版つけよう／日本三百名山(案)特製本在庫ご案内(お求めは直接お茶の水店へ)
中坂本直行画文集▲雪原の足あと▼二五〇〇〇円

——原画花の絵(淡彩2号)付——

中加藤泰安▲森林・草原・氷河▼一五、〇〇〇円

中望月達夫▲遠い山近い山▼一九、〇〇〇円

中藤島敏男▲山に忘れたパイプ▼一九、〇〇〇円

■出版目録送呈

■お買上げ、ご注文は最寄り書店でどうぞ!

茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話03-291-9442振替東京8-24723